レター

1% イソプロピルメチルフェノール含有シャンプー療法で改善を認めた表在性膿皮症の犬の1例

A Case of Superficial Pyoderma Improved by Shampoo Therapy Containing 1% of Isopropylmethylphenol in Dog

甲野 涼^{1,2)} 渡部大容³⁾ 大隅尊史^{1,3,4)*}

¹⁾ 東京農工大学, ²⁾ コジマ亀戸動物病院, ³⁾ 亀戸動物総合病院, ⁴⁾ Vet Derm Tokyo

Ryo Kono^{1,2)}, Hirotaka Watanabe³⁾, Takafumi Osumi^{1,3,4)*}

¹⁾ Tokyo University of Agriculture and Technology, ²⁾ Kojima Kameido Animal Hospital,

³⁾ Kameido Animal General Hospital, ⁴⁾ Vet Derm Tokyo

Received February 6, 2018 and accepted April 29, 2018

犬の表在性膿皮症は、主に *Staphylococcus pseudintermedius* などのブドウ球菌が関与する、犬で一般的な細菌性皮膚疾患であるが、近年はメチシリン耐性 *S. pseudintermedius* (MRSP) の関与に伴う難治性症例の増加や公衆衛生面での問題が注視されている⁴⁾。近年発表された表在性細菌性毛包炎の治療指針では、耐性菌誘導を避けるためできるだけ全身性抗菌薬の使用を控え、消毒薬を含有する抗菌シャンプーや局所塗布薬による外用療法が重要視されているが、シャンプー剤の有効成分として記載されているのはクロルヘキシジン、過酸化ベンゾイル、乳化エチル、ポピドンヨード、トリクロサンのみである²⁾。イソプロピルメチルフェノールは広域スペクトルの抗菌作用を持つことが示されており、本邦においてヒトのハンドソープや歯磨き粉などに含有されている⁵⁾。近年、1% イソプロピルメチルフェノールを有効成分として配合した動物用薬用シャンプー（ゾイック薬用シャンプー BO1.0, 株式会社ハートランド, 京都；以下 BO シャンプー）が発売され、動物の細菌性皮膚疾患への適応が検討されているが、犬の表在性膿皮症に対する有効性は検証されていない。今回、BO シャンプーの使用によって臨床症状が軽減した

と考えられる表在性膿皮症罹患犬の1例を経験したのでその詳細を紹介する。

ベキニーズ, 8歳3ヶ月齢, 去勢雄が, 細菌性膿皮症に罹患した同居犬の診察の付き添いのため, 平成28年10月15日に亀戸動物総合病院に来院した。飼い主の稟告によると, 本症例も数年前より背部, 腹部を中心とする体幹部に丘疹, 痂皮, 表皮小環を通年的に繰り返し呈しているが, 痒痒を伴っていないため, 特に治療は実施していないとのことであった。特記すべき既往歴はなく, 一般状態は良好であった。また, 本症例は自宅でシャンプーが実施できないため, サロンにて市販の低刺激シャンプー (CDC シャンプー, Mt. WOOD, 広島) を用い, 2週間に1回の頻度で数年にわたり定期的にシャンプーが施されていた。平成29年5月27日に来院した際も, 腹部および背部に複数の表皮小環を認めていた (図1a)。ここ1ヶ月間は同居犬に処方している5% クロルヘキシジングルコン酸塩 (5% ビビテン液, 大日本住友製薬, 大阪) を水道水で10倍希釈した液にて患部を1日1回消毒していたが, 新規病変の出現は続いているとのことであった。病変部の皮膚押捺標本を用いた細胞診検査を実施したところ, 球菌を貪食した変性好中球を多数認めたため, 表在性膿皮症と確定診断した。治療相談をしたが, 症例が痒痒を呈しておらず, かつ自宅でのシャンプーは困難であることから, 積極的な治療は希望されなかった。そこで, 試験的に BO シャンプーの有効性を検証するため,

* 連絡先: 大隅尊史

(東京農工大学農学部付属動物医療センター)

〒183-8509 東京都府中市幸町 3-5-8

TEL 042-367-5785 FAX 042-367-5602

E-mail: w5110101@edu.gifu-u.ac.jp

図1 治療前後の臨床写真.

a) 治療開始前. 鼠径部を中心に紅斑, 痂皮および表皮小環が多見される. b) 治療開始13週後. わずかな鱗屑や色素沈着は認めるが, それ以外の発疹は認めない.

図2 腹部病変の押捺標本を用いた細胞診所見.

a) 治療開始前 (図1aの病変). 細胞診スコアは0-4段階の4であった. b) 治療開始13週後 (図1bの病変). 細胞診スコアは0-4段階の1であった.

サロンで用いるシャンプーをBOシャンプーに変更することだけを指示し, 症状の変化を記録することとした. 診断時の膿皮症スコア³⁾は21, 細胞診スコア^リは0-4段階の4であった (図2a). また, 病変部より採材したサンプルを細菌培養感受性試験 (皮膚細菌検査よくばりセット, 株式会社VDT, 東京) に供したところ, *S. pseudintermedius* が分離され, テトラサイクリン系薬剤を除く全ての薬剤に感受性を示していた (感受性: オキサシリン, アモキシシリンクラブラン酸, セファレキシン, セフトキシム, セフォベシン, ファロペネム, エンロフロキサシン, マルボフロキサシン, ゲンタマイシン, ST合剤, クリンダマイシン, リンコマイシン, エリスロマイシン, クロラムフェニコール, ホスホマイシン, リファンピシン, 中間: ミノサイクリン, 耐性: ドキシサイクリン). 13週間後の再来院時, 体幹部の可視病変は著しく減少しており (図1b), 飼い主も明らかに改善し

た印象を感じているとのことであった. 膿皮症スコアは3と減少しており, 掻痒行動も呈していなかった. 細胞診では好中球が検出される病変が無く, 細胞診スコアも0-4段階の1と減少を認めた (図2b). 飼い主の稟告によると, この間サロンで用いるシャンプーをBOシャンプーに変更した以外, 生活環境や食事に変更は無く, ヒビテン液による消毒も実施していないとのことであった. 本症例は, その後もBOシャンプーを用いて2週間に1回の頻度で定期的なシャンプーが施されているが, 著しい症状の悪化は認めていない.

本症例では, 数年にわたり通年性の膿皮症症状を呈していたにもかかわらず, サロンで用いるシャンプーをBOシャンプーに変更したことで, 明らかな臨床症状の改善と長期的な維持が達成できた. 他の治療や環境に変化を与えていないことから, BOシャンプーの効果によって表在性膿皮症の症状が改善し維持されている可能性が強く示唆され

た。一方で、シャンプーの変更によって、界面活性剤や保湿成分など他の成分の影響が関与した可能性にも留意する必要があるが、当初用いていたCDC シャンプーも低刺激シャンプーであった点を考えると、もっとも重要な違いは抗菌作用をもつ1% イソプロピルメチルフェノールが含有されている点であると考えられた。また、本症例は当初5% クロルヘキシジングルコン酸塩希釈液塗布による消毒を指示されていたが、長毛犬種のため病変の存在に気が付きにくいこと、本症例が強い瘙痒を呈していないため飼い主の治療意欲が低いことから、飼い主が継続して実施することが難しかった。一方で、以前より通っているサロンでのシャンプー剤の変更は、飼い主にとって受け入れやすい治療であり、かつ抗菌シャンプーによるより広範囲な治療が、長毛犬種である本症例においてより効果的であった可能性も考えられた。以上をまとめると、本症例においては表在性膿皮症の長期的な管理としてBO シャンプーが有効であった可能性が示唆された。一方で、BO シャンプーの真の効果や適応を検証するためには、より大規模での比較試験が必要であると考えられた。

利益相反

すべての著者は開示すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) Budach, S.C. and Mueller, R.S. 2012. *Vet. Dermatol.* 23: 426–e80.
- 2) Hillier, A., Lloyd, D.H., Weese, J.S., Blondeau, J.M., Boothe, D., Breitschwerdt, E., Guardabassi, L., Papich, M.G., Rankin, S., Turnidge, J.D. and Sykes, J.E. 2014. *Vet. Dermatol.* 25: 163–e43.
- 3) 岩崎利郎, 永田雅彦, 大室農夫, 安藤 純. 2008. 獣医臨床皮膚科 14: 71–75.
- 4) Morris, D.O., Loeffler, A., Davis, M.F., Guardabassi, L. and Weese, J.S. 2017. *Vet. Dermatol.* 28: 304–e69.
- 5) Park, Y.D., Cho, J.W., Seo, W.S., Park, H.H., Shin, S.C., Sano, H. and Kambara, M. 2010. *Int. Clin. Prev. Dent.* 6: 55–61.